

第 55 回 歴史探訪の会 「早春の明日香村散策と土佐街道お雛祭り」

実施日： 2017 年 3 月 15 日（水）

開催地： 奈良県明日香村・高取町

案内人：内海春樹（2579）

【コース】

近鉄飛鳥駅～高松塚古墳・壁画館～文武天皇陵～檜隈寺跡～休憩所(昼食)～キトラ古墳・四神の館
～高取町土佐街道～近鉄壺阪山駅

“春は名のみの寒さかな”の通り、冷たい風が吹きつける中、近鉄飛鳥駅に会員 27 名、一般参加者 7 名の計 34 名が防寒着を着用し集合。会代表の蛇草さんから朝の挨拶を戴き出発。明日香村の畑のあぜ道を進む。15 分ほど歩くときれいに復元された古墳が現れる。



蛇草代表の挨拶



明日香村の田園風景

1. 高松塚古墳 ・ 高松塚古墳壁画館

古墳の前で、発見されたいきさつや、古墳の変遷などの説明がある。45 年前、近隣の農家の人が、収穫した“土しろうが”を保存する為に小山の麓に穴を掘った所“切石”を見つけ明日香村に連絡したのがきっかけだ。高松塚古墳は西暦 700 年前後に築造された古墳で、直径 23m(下段)及び 18m(上段)、高さ 5m の二段式の円墳である。この頃の古墳は終末期古墳と呼ばれ、古墳時代前期の巨大な前方後円墳から円墳や方墳へと形が変わり、古墳そのものも小さくなった。

続いて隣接する「壁画館」に入る。1972 年に極彩色の壁画が発見されたことで一躍注目された。壁画は凝灰岩でつくられた石室内面に塗られた厚さ数ミリの漆喰の上に



内海さんの説明を熱心に聞いています

描かれている。石室西壁と東壁には、飛鳥美人の名で親しまれている女子群像が描かれ、それぞれ4人の女子が黄色、薄桃、赤、緑の衣を着け、黒く長い髪は首の後ろで束ね、唇は鮮やかな赤色だ。同じ壁には緑の地に赤色の縁飾りを付けた「蓋(きぬがさ)」の下に男子群像が描かれ、緑や青、黄などで彩った衣を着け、頭には黒い冠を載せ太刀を納めた包や椅子、杖などを持っている。

四神の図として、北壁には玄武、東壁には青竜、西壁には白虎が描かれ、南壁に描かれているはずの朱雀は残念ながら盗掘穴で無くなっている。天井の約1M四方の範囲に

星座を表現、東西南北七宿ずつ計二十八宿が描かれている。壁画館では、発見された時と全く同じ状態で模写された絵や石室の模型、鏡や飾り金具など出土品も展示されていた。しかし、石室の発掘で室内環境が急激に変化し壁画の劣化が著しく、現在では石室を解体、壁画の修復作業を行っている。



高松塚古墳

2. 第42代「文武天皇陵」宮内庁管理

文武天皇(もんむてんのう 697年即位)は、天武天皇と持統天皇の孫にあたり、母親は後に第43代天皇に即位する「元明天皇」である。在位中に「大宝律令」が颁布したが、持統天皇を後見役としてわずか15歳で立位、24歳で夭折してした。丘陵の小高い古墳からは、遠くに葛城山や金剛山の山並みや明日香村が一望できる。集落を進むと小学校の庭に昔懐かしい“二宮金次郎の像”があり明日香村らしい。



文武天皇陵、文武天皇陵は別の場所との説もあると内海さんから説明があった

3. 檜隈寺(ひのくまでら)と「東漢氏(やまとのあやし)」について

明日香村に住み着いた渡来系氏族、東漢氏(やまとのあやし)の氏寺とされる古代寺院。7世紀後半の創建。

『日本書紀』によると応神天皇の時代に朝鮮から渡来、寺の建設や瓦の製造、オンドルなどの技術を伝来。

檜隈寺の伽藍配置は、塔を挟んで南に金堂、北に講堂、中門は西側に位置し、伽藍主要部は回廊でかこまれている。塔跡には大きな心礎が残り、講堂跡には瓦積基壇が遺存するなど遺構の保存状況は良好である。寺跡は国の史跡に指定されている。かつての境内には、東漢氏の始祖「阿知使主(あちのおみ)」を祀る於美阿志神社が建てられ、塔跡には平安時代の十三重石塔(重要文化財、上部を欠く)が建っている。



十三重石塔



塔の心礎

近くに新しい休憩所がありそこで昼食、内部には明日香村を紹介する映像や写真等が詳しく展示され勉強になる。参加者から「なぜ明日香村はこんなに休憩所や道、トイレなどがきれいに整備されているのか？」と聞かれる。この辺りは「国営飛鳥歴史公園」に指定され国から多額の補助金が出ているから。昼食後、広々した農業体験場を見ながらキトラ古墳を目指す。



4. キトラ古墳

キトラ古墳は、二段築成の円墳で、上段が直径 9.4m、テラス状の下段が直径 13.8m、高さは上段・下段あわせて 4mを少し超えると推測される。高松塚古墳壁画発見の直後、付近の住民から「近くに似たような古墳がある」と知らされ、これがキトラ古墳の発掘調査に繋がる糸口となった。1983(昭和 58)年にファイバースコープによる探査が行われ、石槨の奥壁に玄武と思われる壁画を発見。

キトラ古墳は7世紀末～8世紀初め頃に造られたと推測されている。この壁画は、石室内部に塗った漆喰の上に繊細な筆づかいで描かれたもので、本格的な天文図や、四神像の全て、動物の頭と人間の体をもった十二支像などが確認されている、学術上、価値の高い文化財だ。キトラ古墳壁画の特徴の一つは、動物の頭と人間の体で十二支をあらわした獣頭人身像が描かれていること。古代中国では十二支の人形(俑)をおく習慣があり、キトラ古墳の場合はこの人形を壁画として描き、葬られた人の魂を守ったと考えられる。文化庁が2003年より石室内調査を開始。その結果、壁画はそのままにしておいてはやがて崩れてしまう極端なもろさであることが判った。この壁画を守るため、2004年8月より壁画を取り外し細心の注意をはらって修理、強化処理をおこなっている。

<キトラ古墳と高松塚古墳の比較>

	キトラ古墳	高松塚古墳
四神像 (朱雀、青龍、玄武、 白虎)	白虎が北向き(珍しい)	白虎が南向き(一般的) 朱雀は盗掘穴で無い
天井の絵	星空の様子を精密に描いた 「天文図」	星空をデザインした簡略 された 「星宿図」
四神像、日月像以外の 東西南北の絵	獣頭人身十二支像	男女群像
内部の天井の形	屋根形	平天井
石室の石材	凝灰岩(二上山産)	凝灰岩(二上山産)
石材の数	18	16



復元された古墳の前で集合写真を撮り、隣の町“高取町”に向かう。

5. 土佐街道

奈良県高市郡高取町にある土佐の町は、高取藩 2 万 5000 石の城下町として発達してきた。

飛鳥時代、都造営のため連れて来られた土佐(高知県)の人々が国に帰ることが出来ず、故郷を懐かしんでつけた地名とつたえられている。寛永7年(1640 年)植村氏が藩主として入城後、山上の高取城では日常生活が不便なため藩主をはじめ家臣の屋敷は街道筋に移された。そして次第に城下町が形成され、今も古い町屋が残る石畳の道が当時のメインストリート土佐街道。正面の山が高取城である。

町屋は、当時ほとんどが平屋で2階は屋根裏程度となっていた。“つし2階建て”と呼ばれ、お殿様を見下ろさないという配慮からと言われる。窓には、連子格子が取り付けられ、このような昔ながらの町屋が今も街道沿いに続き江戸時代に迷い込んだかのような感覚を受ける。街道沿いには下屋敷の門が移築されている石川医院がある。城下町としての名残が随所に見え、街道の両脇には水路があって火事の際には防火水に使えるようになっていたり、馬をつないでおく「駒止め」と呼ばれる金具が残っている。また、町屋と町屋の間の隙間には間者等が潜めないよう板張りがなされていた。



土佐街道沿いにある昔ながらの町屋。左が石川医院



植村家長屋門(武家屋敷) 高取藩の筆頭家老屋敷 間口=39.1M、奥行=4M、棟高=5M

江戸末期文政 9 年(1826 年)に建設された。近代武家屋敷表門の遺構を残す貴重な建物である。

漆喰を盛り上げた格子模様の「なまこ壁」が重厚で美しい景観を造りだしている。

現在も子孫(高取町長)が居宅として使用。

6. たかとり「城下町のひな巡り」(第11回)

高取土佐の街なみにある町家には、大切に保管されている雛人形がある。各家や店の入り口に「お雛さま」が飾られ、その家の思い出や、親子の願いが込められた色紙が飾られ、そんな“思い出”と“願い”が綴られている。道端や広場には“ジャンボお雛様”、集会所には全国から寄贈された“天段のおひなさま”を仰ぎ見る事出来る。

今日の例会に一般参加された占部さんから入会したいとの申し出があり手続きを行いました。

心配された雨には降られず、3時頃近鉄壱阪山駅で解散した。





大きなお雛様の前で今日 2 度目の集合写真

写真はたがかけさん、田原さん、菊池さんが撮られたものを使用させて頂きました。